

中国語圏出身の子どもの経験・教育的背景を活かした日本語教育

大上 忠幸 (中国帰国者定着促進センター)

1.はじめに

JSL 児童生徒は年々増え続け、子どもの日本語教育の現場は多様化が進んでいる。様々な国・地域出身の子どもたちが学び、多言語に対応した効率のいい教材や教育方法の開発が求められている。出身国別に外国出身の子どもたちの経験や受けてきた教育を学び、彼らの特性を知ることは、彼らを理解することにつながり、さらに日本語教育の効率のいい方法等を考えることができると考える。このような研究はこれまでにほとんどなかったが、今後の子どもの日本語教育にとって大切な観点といえる。

JSL 児童生徒のなかで中国語圏出身の子どもたちが占める割合は多い。中国語圏出身の彼らにとってモチベーションや効率の上がる日本語指導法はどういうものか。

本発表では彼らが出身国・地域で経験してきたことや、受けてきた教育等から、今後の子どもの日本語教育に活かせるものを考察し、実際の教育現場で実践的に検証し、提案できるものを探ることを目的とする。

2.教育現場での実践

発表者は1995年からJSL 児童生徒の日本語教育に従事している。本発表では、中国語圏出身のJSL 児童生徒が出身国で経験してきたことや、受けてきた教育を活かす方法を20年にわたる教育の中で実践してきたことなかで有用と思われるものを3つ紹介する。

2.1. 中国の歌を活用して五十音の指導

大阪の公立小学校において、日本語指導担当として勤務していたとき、中国出身の来日間もない小学生に、ひらがな五十音の指導の際、楽しく学べる方法として、先輩教師に歌

をつけて歌うようにするといいとのアドバイスを受け、最初は「かたつむり」のメロディで行なったが、中国出身の子どもたちが知らなかったため、あまりうまくいかなかった。そこで当時中国で流行していた「小芳」(李春波)の節をつけたところ、みな知っている歌のため、大変喜んで取り組み、大きな声を出して、早く五十音を覚えられた。

具体的な実践としては、中国の日本語教育でよく知られている五十音図の練習「小鴨歌」を、教室に行ごとにイラスト入りで書いたものを掲示していたが、それを指し示しながら「小芳」のメロディに乗せて歌った(1996年2月～1997年3月の小学1年から6年までの五十音指導時)。

あひるの あかちゃん あいうえお
かきのみ くりのみ かきくけこ
ささのは さらさら さしすせそ
たいこを たたいて たちつてと

(以上、「小芳」Aメロで)

なかよく ならんで なにぬねの
はちさん はたらく はひふへほ
まちのこ むらのこ まみむめも
やまから やまびこ やいゆえよ

(以上、「小芳」Aメロで)

らんぶに ろうそく らりるれろ×2
わらって わになる わいうえを×2 ん
(以上、「小芳」Bメロ [=サビ] で)

2.2. 中国の歌の日本語版を活用した聴写指導

中国帰国者定着促進センター(以下、帰国者センター)の中学生クラスにおいて、「ねずみは米がすき」(美山加恋)の歌を聞かせ、歌詞を書いたプリント(ところどころブランク)の穴埋めの形で聞き書きをする学習を行なった(帰国者センター78期2006年4月の実践)。

6カ月の研修の4カ月目あたり。4名の中学生クラスで女子4名(12歳1人、13歳1人、15歳1人、16歳以上1人)。歌についての情報は与えず、まず1回聞かせた。すぐにメロディーが中国で聞いたことがあるものだと気づく生徒がおり、聞き終わるころには、みな元の歌が中国で大ヒットした「老鼠愛大米」(楊臣剛)だと分かった。

みな、よく知っている中国の歌が日本語になっていることに驚きつつも、嬉しかった様子だった。日本語の歌を必死に聞き、聞き取った歌詞を日本語を書くという作業を楽しんでいた。この方法は聞くことや書くことを学ばせるのに中学生(このときは女子だけだったが)に大変有効であった。

2.3. 看図作文を意識した自己紹介文の実践

発表者は中国語圏出身の子どもたちが出身の国・地域で、どのような教育を受けてきたかを教科書等から探り、中国語圏出身の子どもたちの言語観や言語学習観を調査してきた。そのなかで、特に中国の特色ある作文教育法「看図作文」は日本の国語教育や日本語教育にはないユニークな指導法であり、活用すべきものであると感じてきた。

発表者自身、帰国者センターや中国の大学において看図作文を応用した日本語作文の指導実践を試している。なかでも帰国者センターの子どもクラスでは私MAPという自己紹介の作文の実践を実施している(発表者が関わった2002年1月～2016年1月)が、看図作文のやり方にも類似し長く続けられている。

私MAPは、研修期間(4カ月あるいは6カ月)の最後に行なう学習発表会のおりに、自己紹介の発表をする際に、自分自身に関する絵を描き(補助的に言葉を付け足してもよいとした)、その絵を手がかりに教師とのやり取りの中で、ランダムに短作文を書く。最後にスピーチの文になるよう、順番を入れ替え、清書するというものである。

この作文方法が長く続けられているのは、中国の伝統ある看図作文に似た手順、やり方で作文が完成していくためだと考えられる。実際に発表者がこの授業を担当する際には児童から「看図作文みたいだ」との感想を聞く。最終目的は、スピーチの作文を書くという負担の大きいものだが、中国の学校で慣れ親しんだ学習方法で作文していくことにより、その負担が軽減され、楽しく完成し、いつの間にか低学年の児童でも400字ほどのスピーチ文を完成させられるものになっている。

3. むすび

本発表は中国語圏出身の子どもたちが受けてきた教育や経験を活かした日本語教育の方法を実践的に考察するというものだったが、有用だった中国で親しんだ歌にからめた日本語学習、および中国の特色ある作文教育法「看図作文」を応用した実践を紹介した。その他、中国の国語教育のピンイン指導の要領を応用した文字表記の指導等も長く続けている。

こうしたやり方は、中国出身の子どもたちは慣れ親しんだ方法のためか、教師が何をさせたいのか容易に理解でき効率が上がった。

中国語圏だけにとどまらず、様々な児童生徒の出身国での教育や経験を学んでいくことにより、教える幅が広がり、日本人の児童生徒も含め、日本の学校で学ぶ児童生徒がより楽しく効率よく言語能力を身につけられると考える。

【参考文献】

池上摩希子・大上忠幸・小川珠子(2003)「実践報告—中高学年児童クラスにおける「書くこと」の指導・再考」『中国帰国者定着促進センター紀要』10, pp.13-58

小川珠子・齋藤恵(2007)「「文章の型」を利用した作文プログラムの試行—所沢センター中学生クラスにおける実践から—」『中国帰国者定着促進センター紀要』11, pp.58-50